

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520725

研究課題名(和文) 画像資料・文献史料の総合化による古代東アジア音楽文化史の研究

研究課題名(英文) The study of ancient eastern Asia musical culture history according figure data and historical documents.

研究代表者

萩 美津夫(Ogi, Mitsuo)

新潟大学・人文社会・教育科学系・フェロー

研究者番号：80115013

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：中国・朝鮮における古代石窟・古墓壁画、あるいは出土した陶俑等にあらわされている楽器や、舞踊・奏楽資料によって、古代東アジアの音楽文化を考察検討した。その成果として、まず、第一に壁画・陶俑等の画像資料により新資料を蒐集できたこと、第二に画像資料と文献史料の総合化によって古代中国、朝鮮(主として1～7世紀)の音楽文化の比較検討を行い得たこと、その結果として第三に中国魏晋や北朝の楽器資料中の臥箜篌・阮咸・長簫等と高句麗の玄琴・阮咸・長簫の共通性が、壁画や陶俑などによって確認できたことなどがあげられる。これらの調査検討の成果は、4～7世紀の朝鮮・中国音楽の日本への伝来の背景として重要である。

研究成果の概要(英文)：I collected ancient instruments, dancing appearance and so on that were described by mural decorations, pottery figures and considered on ancient Chinese and Korean musical culture.

First result is many new data. Second result is comparative consideration on Chinese and Korean instruments. Third result is concretely the fact of common instruments, Gakugo(臥箜篌) and Genkin(玄琴), Genkan(阮咸), long Sho(簫) and so on.

These results are important more than ever on comparative studies of Japanese ancient curt music.

研究分野：日本古代文化史

キーワード：壁画 陶俑 楽器

1. 研究開始当初の背景

日本古代音楽文化は、少なからず、中国・朝鮮音楽文化の伝来とわが国独自の発展によって形成されてきた。東アジアにおける日本・中国・朝鮮音楽文化の究明と比較検討は、その古代文化の共通性と、各地域の特色を明らかにする上で寄与するところは大きいと考える。具体的には、国家における制度的成立と発展であり、楽人・楽器・装束・楽制等の調査研究が必要となる。これらを音楽文化と称することができ、それぞれ、史資料として探索蒐集し、比較検討することが重要である。

これまで申請者は、日本古代音楽史を研究してきたが、平成 18 年度以降の 6 年間は、おもに中国・朝鮮に残存するこれらの古代音楽関連史資料を博捜し検討をくわえてきた。しかし、近年における中国の考古学的成果は目覚ましく、次々と発見され、音楽文化関連資料も、いまだ大量に残存しているものと推察される。

したがって、まずこれまでの調査研究において地域的・時間的都合で割愛せざるを得なかった音楽文化資料の残存する新たな地域の実態調査を行う。中国では華北の山東省、寧夏回族自治区、華中の湖北省、華南の四川省等における図像資料の調査研究を行う。具体的には、石窟壁画、仏像等にあらわされたレリーフ、陶俑にあらわされた楽人や楽器の調査が中心となる。朝鮮では、慶尚南道、全羅北道、全羅南道、江原道における、主として高句麗・百済・新羅の三国時代、統一新羅時代の残された遺物にあらわされた奏楽や舞踊図の調査が中心となる。

同時に、申請者がこれまで進めてきた文献史料の蒐集を、日本、中国、朝鮮史料において継続させる。日本の古代音楽文献史料、中国正史史料はすでに蒐集済みであるので、当該期間はことに、中国古代の『戦国策』『世説新語』『楽府』『抱朴子』等文学関連史料の調査蒐集を継続する必要がある。また、日本中世音楽関連史料、朝鮮高句麗壁画関連研究論文資料についても蒐集する。

そして、これらの成果に基づいて、図像資料と文献史料の総合化をはかり、比較考察検討を行い日本・中国・朝鮮の古代音楽文化の歴史を検討考察し、その共通性と独自性を明らかにすることは重要である。

2. 研究の目的

第一に中国、朝鮮の古代遺跡や遺物の実地調査を行う。具体的には中国では石窟壁画、仏像台座・光背等のレリーフに表現された音楽関連資料として山東省黃石山・龍洞石窟、寧夏回族自治区では須弥山石窟にあらわされた奏楽資料、そして山東省・四川省にある漢画像石にあらわされた奏楽・舞踊・百戯資料、また各地の古墓から出土している陶俑にあらわされた奏楽・舞踊・百戯資料、さらにこれらの時代に先立つ古代音楽資料として、

湖北省曾侯乙墓等から出土した楽器資料等の調査を行い新資料を加えることが重要である。

朝鮮ではこれまで実地調査できなかった慶尚南道、全羅北道、全羅南道、江原道の百済・新羅時代の古寺遺跡での調査である。具体的には全羅北道の弥勒寺・来蘇寺・禅雲寺、江原道の月精寺・上院寺・新興寺等での奏楽関連資料の蒐集を行う。これらにはわずかではあるが、音楽関連図像資料が残されている。

第二には既述のように中国古代の『戦国策』『世説新語』『楽府』『抱朴子』等文学関連史料の調査蒐集を継続する。日本文献史料では、古代に引き続いて中世における古記録類を中心とした音楽文献史料を蒐集する。

第三に、これら図像資料、文献史料の総合化により、考察検討を行い、古代中国・朝鮮の音楽文化について、楽器・舞踊・楽人・楽制等多方面から明らかにする。また、比較検討を行い、共通性、独自性を把握し、それらの歴史的背景を考慮しつつ、各国の音楽文化を把握し、音楽文化の特色を検討考察する。

3. 研究の方法

前項の目的でも述べたように、近年における中国の考古学的成果は目覚ましく、音楽文化関連資料も、いまだ大量に残存していると推測される。したがって、第一に中国における古代石窟に描かれた壁画や仏像台座や光背等にあらわされたレリーフ、古墓遺跡群出土の陶俑、あるいは画像石等、これまでの調査研究において地域的、時間的都合で割愛せざるを得なかった音楽文化資料の残存する新たな地域の実地調査研究を行う。具体的には華北の山東省、華中の寧夏回族自治区、湖北省、華南の四川省などが中心となる。朝鮮では慶尚南道、全羅北道、全羅南道、江原道の百済、新羅、高句麗関係音楽文化資料調査研究が主流となる。

第二に、同時に中国古代の文学関連史料の調査蒐集を継続し、日本においても、古代に引き続いて中世における古記録類を中心とした音楽文献史料を蒐集する。

第三に、これらの蒐集した史資料の総合化により、各地域の個別研究を進め、続いて比較研究を行い、古代日本、中国、朝鮮における楽器・舞踊・楽人・楽制等の音楽文化に関する考察検討を進める。

4. 研究成果

第 1 に、図像資料の蒐集と新たな資料が確認できたことが、その成果としてあげられる。まず中国では、平成 24 年度の山東省調査では、龍興寺出土仏像台座や光背に残されたレリーフの奏楽資料、黃石山・龍洞石窟における同様の資料が新資料として評価できる。また、漢画像石では、済南・済寧・沂南・臨沂などで孝堂山墓祠漢画像石・武氏漢画像石・北寨墓画像石等での奏楽・舞踊・百戯図の資料の確認調査を行い、資料蒐集の成果があった。

平成 25 年度の四川省調査では、文殊院、寶光院での調査において、南北朝期の石碑から新たな奏楽菩薩資料を発見した点が重要な成果である。また、武侯祠の漢画像石墓での奏楽資料も有効な成果であった。

平成 26 年度は湖北省での調査研究を行った。荊州では青磁宴楽俑等、武漢では青磁弾臥箏篋俑等の新資料が注目される。また、随州では著名な曾侯乙墓等における楽器群の確認調査を行った。

平成 27 年度は寧夏回族自治区の調査研究を行った。ここでは固原の須弥山石窟円光寺台座の音楽資料等を新資料として見いだしたことが大きな成果であった。

次に韓国では、平成 24 年度の慶尚南道・全羅北道の調査研究では、金海等の伽耶琴発祥地において、伽耶国文化中の音楽関連資料、全州等においては百濟関係音楽資料の蒐集を行った。

平成 25 年度的全羅南道調査研究では、華嚴寺・雲住寺等での仏像光背での音楽資料の調査を行ったほか、光州の新昌洞遺跡出土の 7 絃楽器の確認調査がきわめて有効な成果であった。

平成 26 年度には、前々年度行うことができなかった全羅北道扶安郡における百濟関係寺院での音楽資料を調査研究し、百濟時代の石仏が残る石仏寺、百濟時代末期の金山寺・来蘇寺等での調査確認を行い、奏楽資料を蒐集した。

平成 27 年度には、江原道の新羅時代の月精寺・上院寺・新興寺等の調査研究を行い、ことに上院寺梵鐘に統一新羅時代の音楽資料として菩薩奏楽のレリーフを実地調査確認ができたことなどが特筆される成果であった。

第 2 に、文献史料の成果をあげる。まず中国文献では、漢代～唐代の文学関係に現れる音楽資料を整理した。具体的には、『楽府』『戦国策』『抱朴子』『世説新語』『顔氏家訓』『封氏聞見記』等である。日本古代文献では、あらためて六国史、『東大寺要録』、寺社資材帳等における古代音楽関連資料、さらに古記録、文学作品等にもみられる中世音楽史料まで広く蒐集整理した。また、韓国国立中央図書館において、高句麗壁画にあらわされた音楽に関する研究論文や図書を調査研究し、多数の文献を蒐集した。

第 3 に、これらの蒐集した史資料の総合化により明らかになったこととして、中国魏晋や北朝の楽器資料中の臥箏篋・阮咸・長簫等と高句麗の玄琴・阮咸・長簫の共通性が、壁画や陶俑などによって確認できたことなどがあげられる。

第 4 に、発表成果として、古代日本音楽と中国音楽に関連した風流を素材として比較研究し、論文として発表した。また、口頭発表として、平成 25 年 10 月 26 日(土)に正倉院展講演として「聖武朝における歌舞の隆盛と和琴」の演題で、同年 11 月 3 日(日)には、新

潟史学会第 63 回研究大会において「7 世紀における唐楽伝来の可能性を考える」という演題で講演を行い、その成果の一部を披露した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 荻美津夫, 「佐渡の神楽・能,そして舞楽」, 『佐渡・越後文化交流史研究』第 71 号, 2016 年, 1-12 頁, 査読有
2. 荻美津夫, 「越後の舞楽-弥彦神社の舞楽の名称を中心に-」, 『新潟史学』第 16 号, 2014 年, 19-32 頁, 査読有
3. 荻美津夫, 「奈良時代における『先人の遺風』としての『風流』とその展開」, 關尾史郎編『環東アジア地域の歴史と「情報」』智泉書院, 2014 年, 89-116 頁, 査読有
4. 荻美津夫, 「楽家大神氏の系譜について」, 『大美和』第 126 号, 2014 年, 39-45 頁, 査読無
5. 荻美津夫, 「陵王荒序の秘曲化について」, 『磯水絵先生遺曆記念論文集』和泉書院, 2013 年, 175-195 頁, 査読無
6. 荻美津夫, 「从魏晋五胡时代河西地区的砖画壁画中看到的音乐描写」, 中共高台県人民政府・甘肅敦煌学学会・敦煌研究院文献所・河西学院編『高台魏晋墓与河西历史文化研究』甘肅教育出版社, 2012 年, 55-65 頁, 査読無

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 荻美津夫, 「7 世紀における唐楽伝来の可能性を考える」, 新潟史学会第 63 回研究大会, 2013 年 11 月 3 日(日), 新潟大学人文学部
2. 荻美津夫, 「聖武朝における歌舞の隆盛と和琴」, 正倉院展, 2013 年 10 月 26 日(土), 奈良国立博物館

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻美津夫 (Ogi Mitsuo)
新潟大学人文社会・教育科学系フェロー
研究者番号：80115013

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：